



児

女

近江八景乃和歌

頭書源氏講釋入

源氏物語繪盡大意抄

重

溪齋英泉画

寶

書肆甘泉堂梓

Handwritten text in vertical columns, likely a commentary or preface. The text is dense and written in cursive. It discusses the source of the book, mentioning '源氏物語' (Genji Monogatari) and '繪盡' (Eizhin). It also mentions the artist '英泉' (Eisen) and the publisher '甘泉堂' (Kansentō). The text is written in multiple columns, with some characters in red ink.

Red square seal impression with characters in seal script.



山
 小
 海
 海
 舟
 舟
 舟

近江
 八景
 石山
 の
 月
 殊

吉帆引く
 大橋ふわさ
 舟を今
 舟の浮く所
 舟の進る所
 舟のあまきこけ
 舟のまよふまがら
 舟のあまびた
 舟のまよふまがら
 舟のあまびた
 舟のまよふまがら
 舟のあまびた



舟のあまびた
 舟のまよふまがら
 舟のあまびた
 舟のまよふまがら
 舟のあまびた
 舟のまよふまがら
 舟のあまびた
 舟のまよふまがら
 舟のあまびた
 舟のまよふまがら
 舟のあまびた
 舟のまよふまがら
 舟のあまびた
 舟のまよふまがら
 舟のあまびた
 舟のまよふまがら



此源氏物語の事。昔より貴賤をわく人の好むるや他書
 小紙より。さしよば此の道の先達心切小。さめくする。註解をくま
 たりと書籍半に汗し種々充たふ不恒。其志一なるも其
 いとむ。其本をくま。清得の事。別あり。亦清得の事。解
 十事。又か。ま。故人の註釋せ。河海明皇孟澤。岷江
 湖月。たひ。卷数多き大部の品を更る。つ
 十帖をくま。源氏傳の轉々。俗色抄。忍草。ゆめて。同。合。ま。ま
 ま。か。ま。者。か。く。一。階。子。も。た。か。く。か。か。

天保丁酉冬再版
 李周主人



るゆけりやうのふ
 るたりのけり八月
 ちまきかきりあか
 らむ人この耳目を
 おどろくまをどのる
 ふのをあてりく
 ほくうまのけてま
 てまうるまきり
 武部ふ作せらま
 けままきまのら石
 山寺小通次して
 け事をいのり中ふ
 折しも八月十五敷
 の月湖水ふるり
 うおのづりうら
 ままこころまきふ抱

箒^{うき} 教^{うき} ぬま^{うき} お^{うき} の^{うき} う^{うき} け^{うき}

後のまきの空ふてり
 そひそまふうらび
 なるをりまきね先
 ふとを佛のああり
 ける大般若のけり
 を本号ふやうけ
 てまが頂テの石の
 ぶまきをかたあ
 たりまき頂テの
 巻ふてふひふみ我
 かりたりとむや
 りてとうらとま
 午後やまてまの
 志やうまきげのなり
 大般若經一部六百
 巻をうらうかき

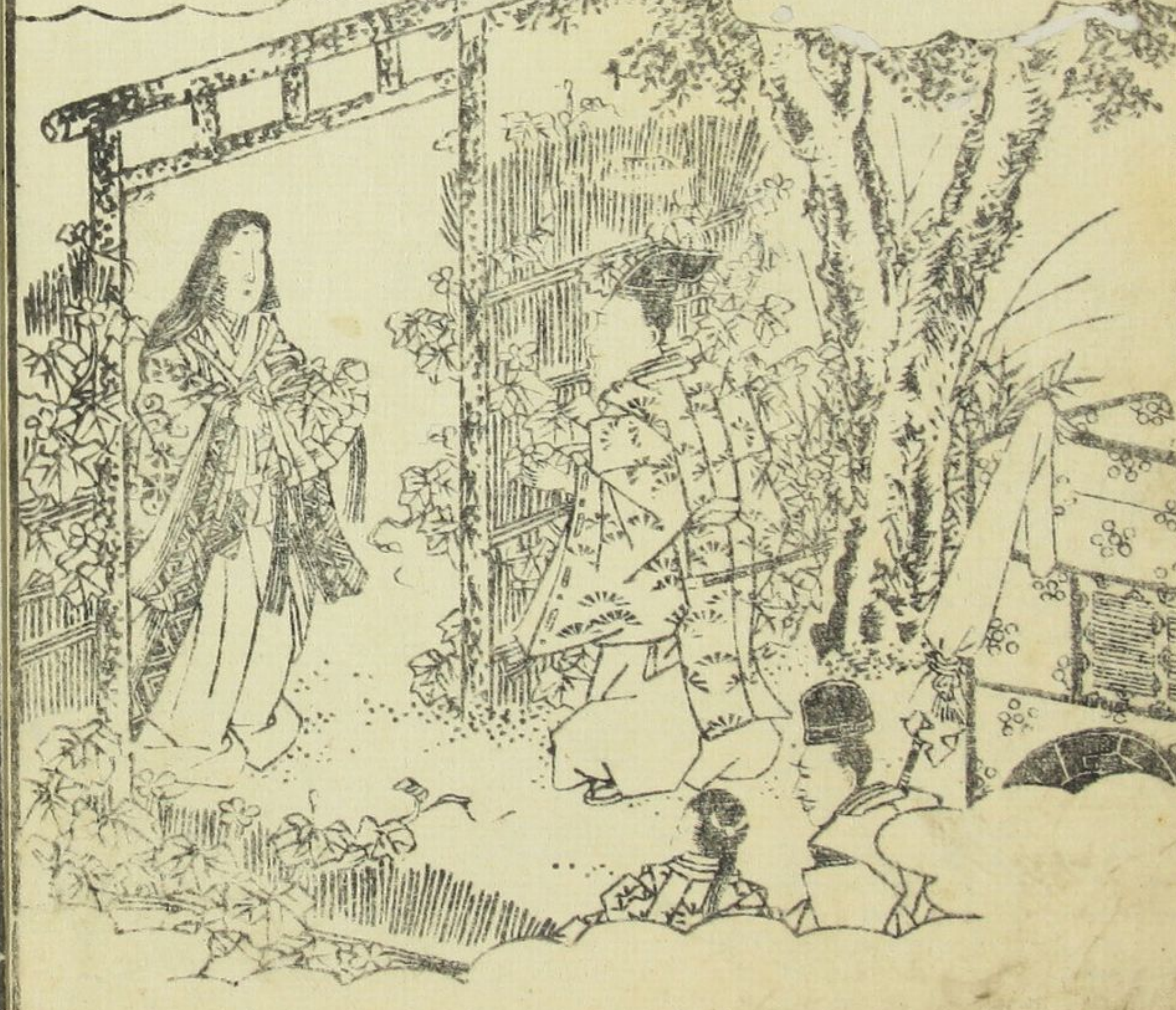
う^{うき} 空^{うき} け^{うき} せ^{うき} ぶ^{うき} くの^{うき} 本^{うき} の^{うき} ぶ^{うき} 人^{うき} が^{うき} ぬ^{うき}



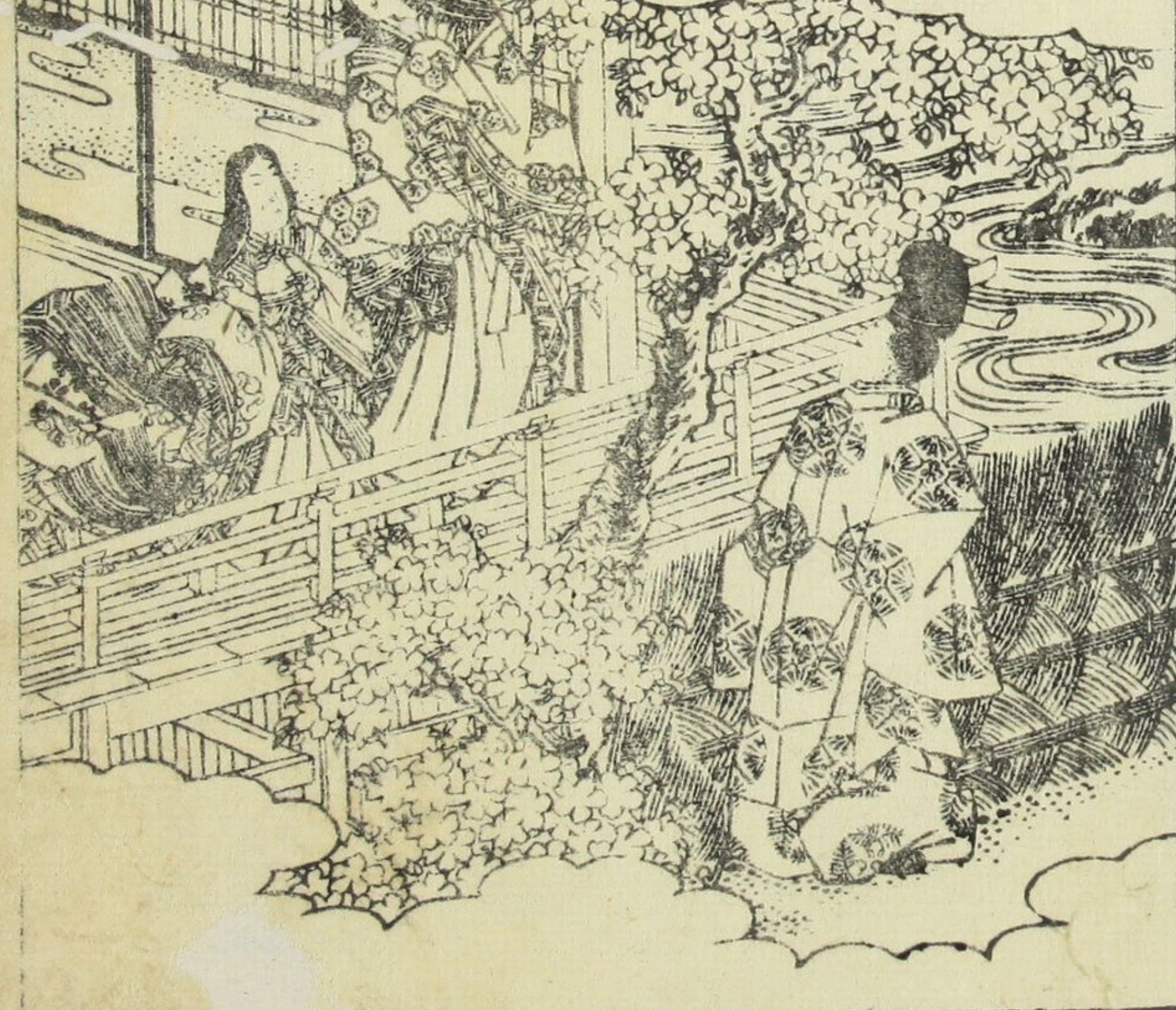
うらゝて世納しけ
 が今小石山小あり
 との小光録式を九大
 居ふあせういふの上を
 志まふかつかあふ上
 そく周公且而居
 易のいふ一をん
 ぐ在納云々垂相
 の一ありをいふらひ
 つかき知一なる成じ
 せとより次者なら
 くらへく二十四帖小
 かくくせり一を
 権大納云々成不注
 書せまをくまて成院
 小まあしをる

法成寺の八及園自興
 書を如らまそいりく
 付物世世皆式部が
 作とのこあり老比
 丘筆を加ふるあり
 と云々
 誠小君父のまどり
 仁美の道好久の深善
 櫻の縁小いるまをよ
 まをのせげといふる
 あ
 そのかむき莊子の
 寓言小いりまの
 ありあといのより免
 まら小ひるあり一歌
 の中ふはまの上のるを

夕顔
 夕
 ぐれよ
 花乃
 夕
 ぐれ



若葉
 小つえ
 福小
 けり
 わり
 の



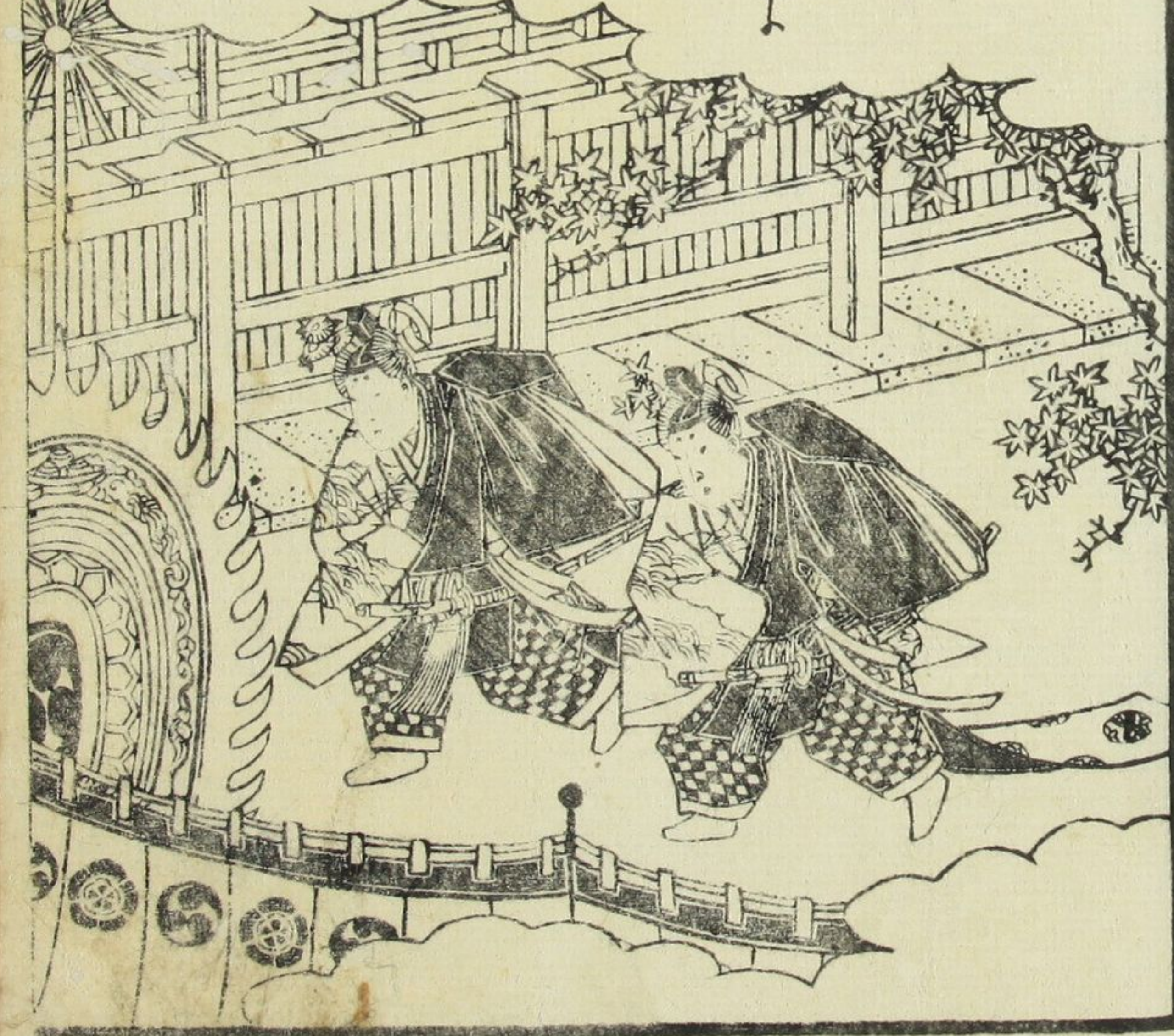
まぶらしてうたひやくする
 多小武武松の名を
 わくくあてはふ武松と
 号せしむるなり
 一様小云武松の名も
 うたひやくするもそは後小
 松の花のやうり小松の
 字不改めしなり云々
 武松小云一条の院の内
 りのどどりの上東院
 へあはせしなりとてそは
 ありのもののあはれを
 いぢりあせしなりそは後
 ひろふよりそは名を
 とまりなり
 石山小云らうりて

ままつひたる
 末摘花
 あつりき
 いろとも
 ここの
 まま
 けん



すはありのあまを
 八月十五夜の月湖水
 うつりて物産のそは
 室小うらぶをそは
 さたあと佛産の煙
 文をひらきてうけ
 との儀ハ実あきとて
 用ひざるなり
 大般若經一巻を書
 て替納け義ハまも
 るなりと云々
 須磨の美小深氏の
 させんの子をうたひ
 八西の宮の元大臣
 言明公云々
 此祝信どぐりて

紅葉賀
 ののち
 あり
 あり
 あり
 あり
 あり



なつあつてを
むすめをききふり
書せりいとせき

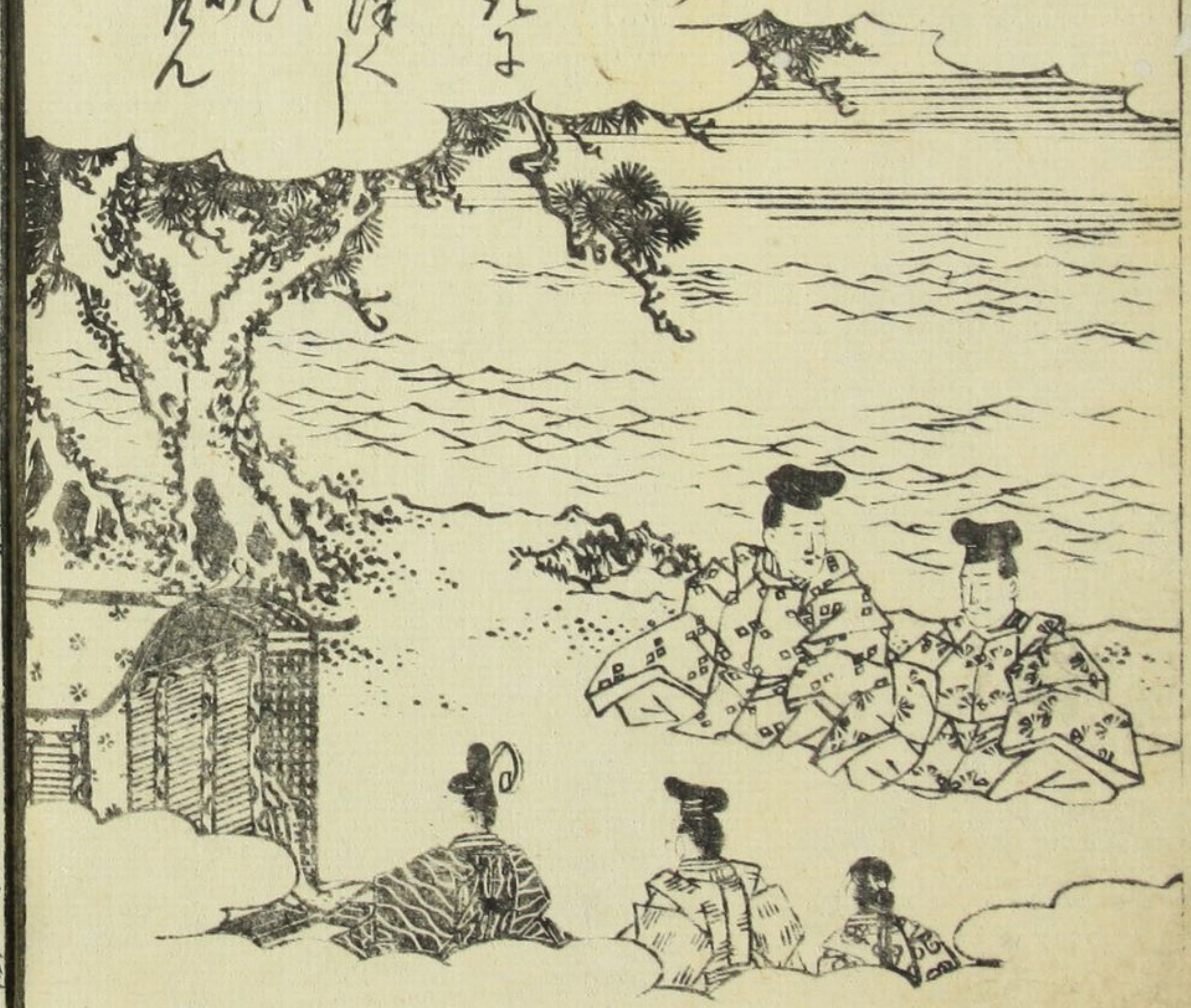
後永業冬公の世儀
問答の跋小云班魁
が史記を班固が書き
つぎは宗武が源氏
物語小大武二位が
宇治十帖を七人傳
りし事のあるや
小云、

源義辨引抄云
三光院の御説小云
宇治十帖小大武三位
が等との説に成
用ひむ文章の系小

くさるるは宗武部日
ごとく文辭をきき人
く書きさるりも故
帝八四代目年月六
十三年の後あるに
人の詞づらひも
一そらりゆてゆく
世上のあらひも
思ひとりくあり
と末代小あり
りきわひを文章小
あつて
は物語筆記の記さ
まべありあつて
宗武部が作りつと
も分明なるは皆一

三三三
零漂

かぞ
あつて
おのひ
なつ小
ををばく
らん



三三三
道生

あつて
まとの
を



宣一七信一が
 比物語院本一
 抄孟洋抄
 以成竹自筆の
 もごとく今世
 けらるる源の
 合取於一々家
 とせり
 二条帥伊房本
 冷泉中納言朝隆本
 堀河九大臣俊房本
 黄表紙といふ
 九大臣の筆跡

あまの
 さらの
 せきや
 けり
 なまじ
 志げま
 ねまの
 中を
 こころ



後一位藤子本
 土御門右大臣女
 系極北政新
 法成寺園白本
 尚侍及本といふ
 又条三位俊成本
 東極中納言定家本
 青表紙といふ
 おの〜院本といふ
 とも皆異同あり
 古写本をくぐり合
 せし且了見を加ふ
 べきものら昔もの
 大いふはる古今の
 異言あり
 河内本八河内の子

あまの
 けり
 なまじ
 志げま
 ねまの
 中を
 こころ

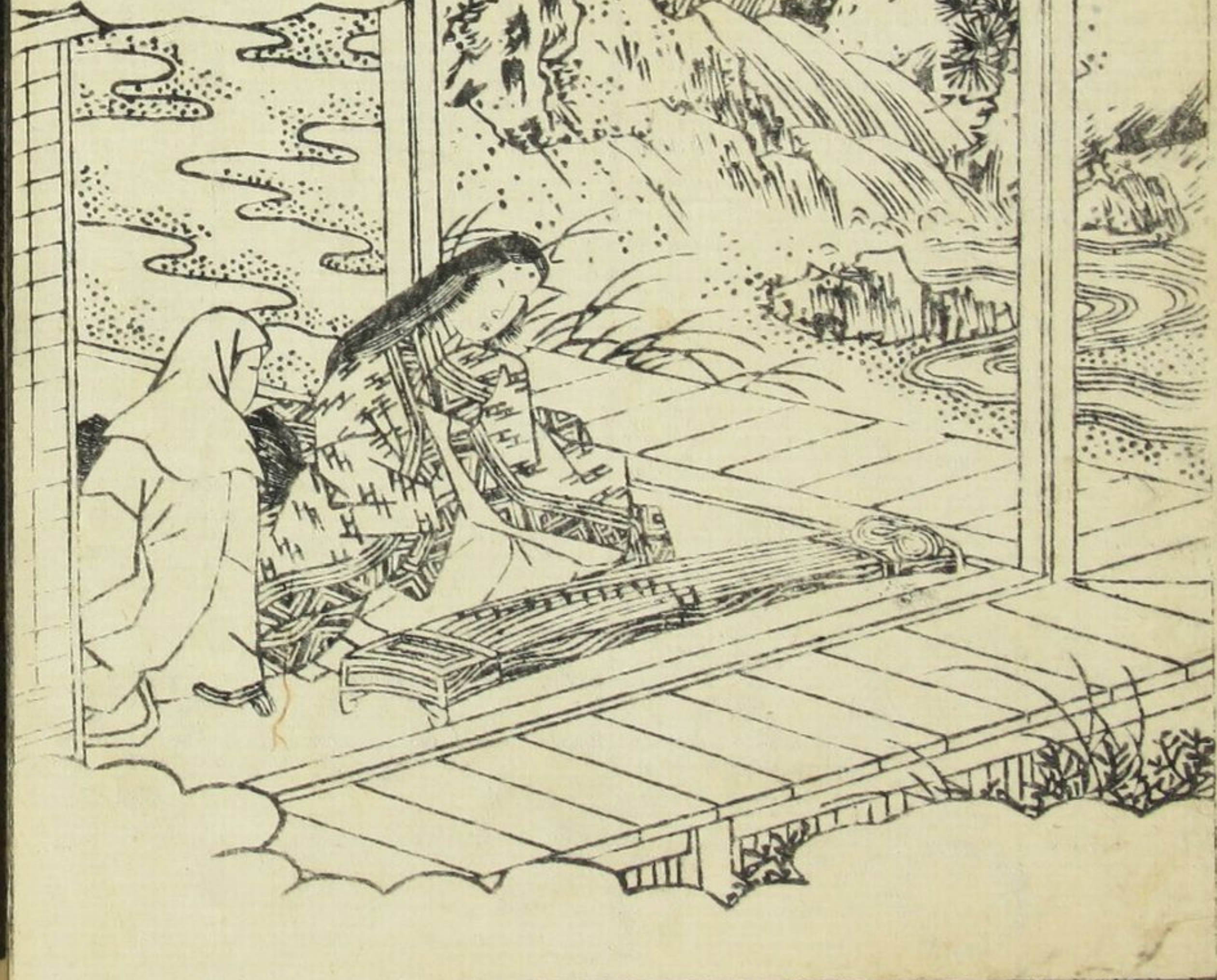


大監物源の光乃
 八の本を以て授合
 取捨し家の本
 とせしとき河内
 本とよみ
 紹巴抄ふまはりの
 たりふ本の是矣
 あり定家の御自
 筆の青表紙中
 頃とんぜろのやう
 ありしるゝ河内
 の守光乃源氏抄
 巻をとりしき
 あそひしきしき
 河内本とせし
 ろしき

耕芸老人河内本
 を伝ふてはたご
 き取くをのりき
 一本を用ひあふ
 云々
 宗祇定家の御
 本をゆゝ思
 且て志多良とい
 ひ一人ふあひ
 さま青表紙傳
 受しきのちれい
 おりしきとを
 一条禅園の御本
 まいりしき三
 条西乃
 ころしき
 としき

松風
 舟を
 之を
 海
 さふ
 きふ
 海川
 海

薄雲
 海川
 海



あるきりひ道遠
院友へ云ふゆき
まじりゆとあり
云々
辨り抄ふ云系極
中納言定家々の
本青表紙と号し
宗祇用ひき今ふ
るあま一華堂乘
阿云定家の青表
紙を因防の函の
守ぬき一覽せり
外題ハ青表紙不
定家々うちつけ
がきり百四代後
土御門の院宸筆

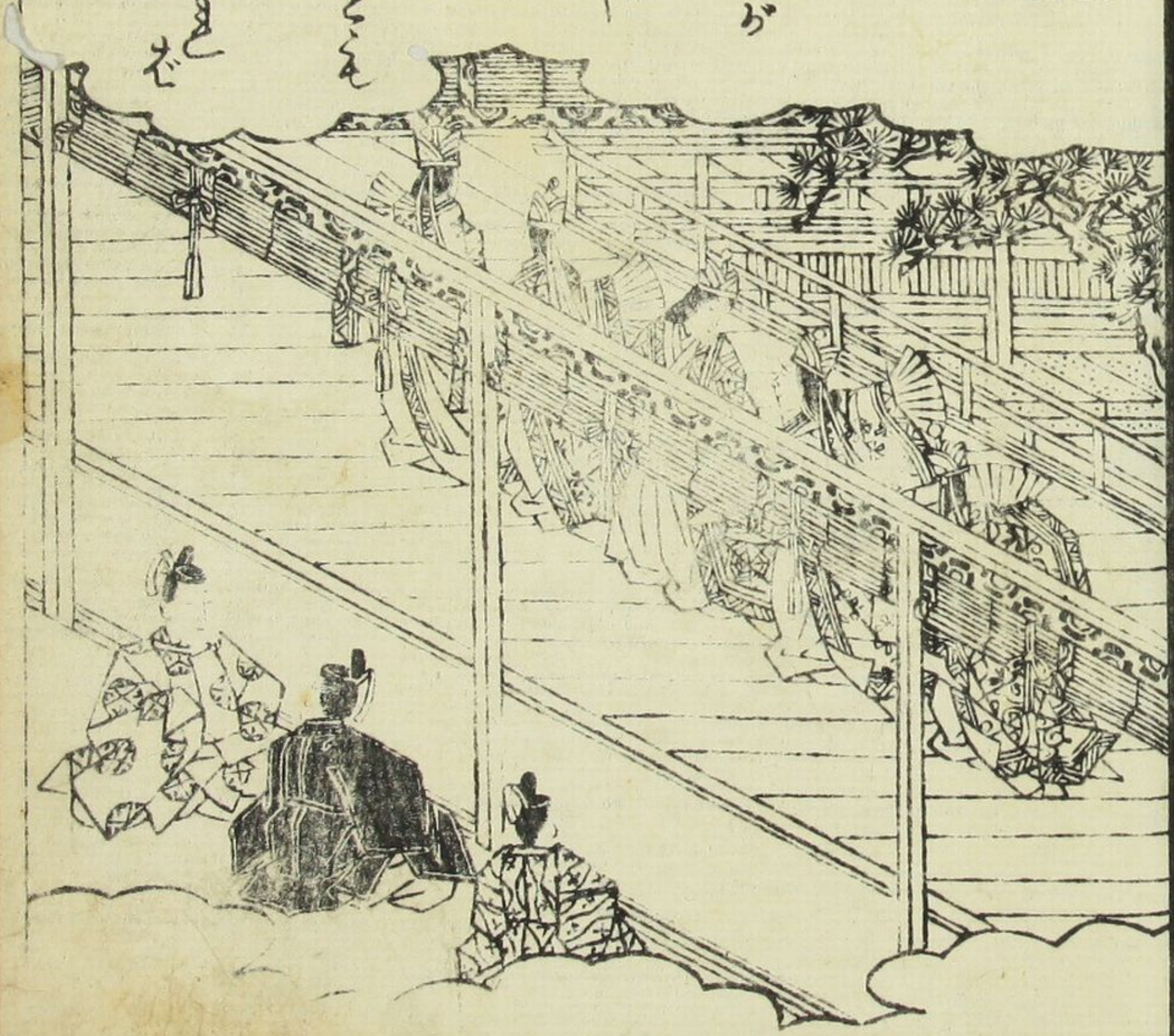
わてげごのをまん
中ふかたなり
今母不源氏の外
駈をまん中ふる
事ハこときを例と
せり定家ハ日華
相壺苑の宴橋姫
の三冊之余ハ後成
竹のむきあまの
筆と水尾づくの
巻うせつるを遺遠
院うきうのあり
云々
宗文要領ふに河内
本青表紙と云々
物鏡二本ふことき

朝類

をりの
法由
まね
あまの
けふの
はうり
まね
しぬん



乙女
をとり
をとり
神さび
あまの
まね
まね
まね
まね

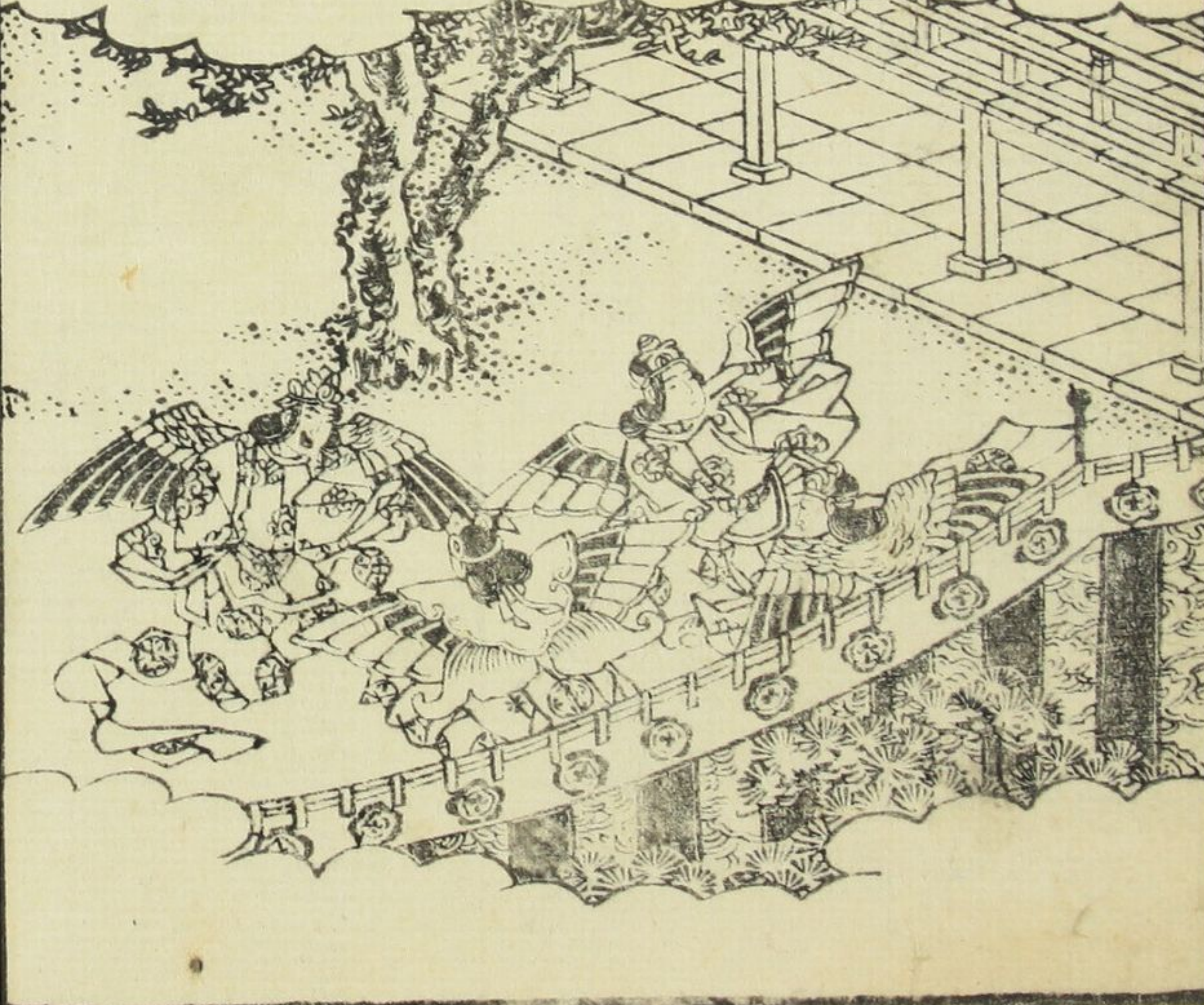


世の抄物ふりけく
 いづれ古抄ふあへる
 を引くゆゑ今又
 およぶとてあまか
 のうちとてひ河内
 のもあま青表紙小
 もあまよきを用ひ
 あまよきをのぞく
 たるべきゆゑま
 うちのりり今の
 世小抄のりりあま
 りのりりも傳写のあ
 まりりりりりひのち
 ぐひ脱落誤り多
 してさよとてりりり
 所多きふはものか

いづれ古抄ふあへる
 を引くゆゑ今又
 およぶとてあまか
 のうちとてひ河内
 のもあま青表紙小
 もあまよきを用ひ
 あまよきをのぞく
 たるべきゆゑま
 うちのりり今の
 世小抄のりりあま
 りのりりも傳写のあ
 まりりりりりひのち
 ぐひ脱落誤り多
 してさよとてりりり
 所多きふはものか

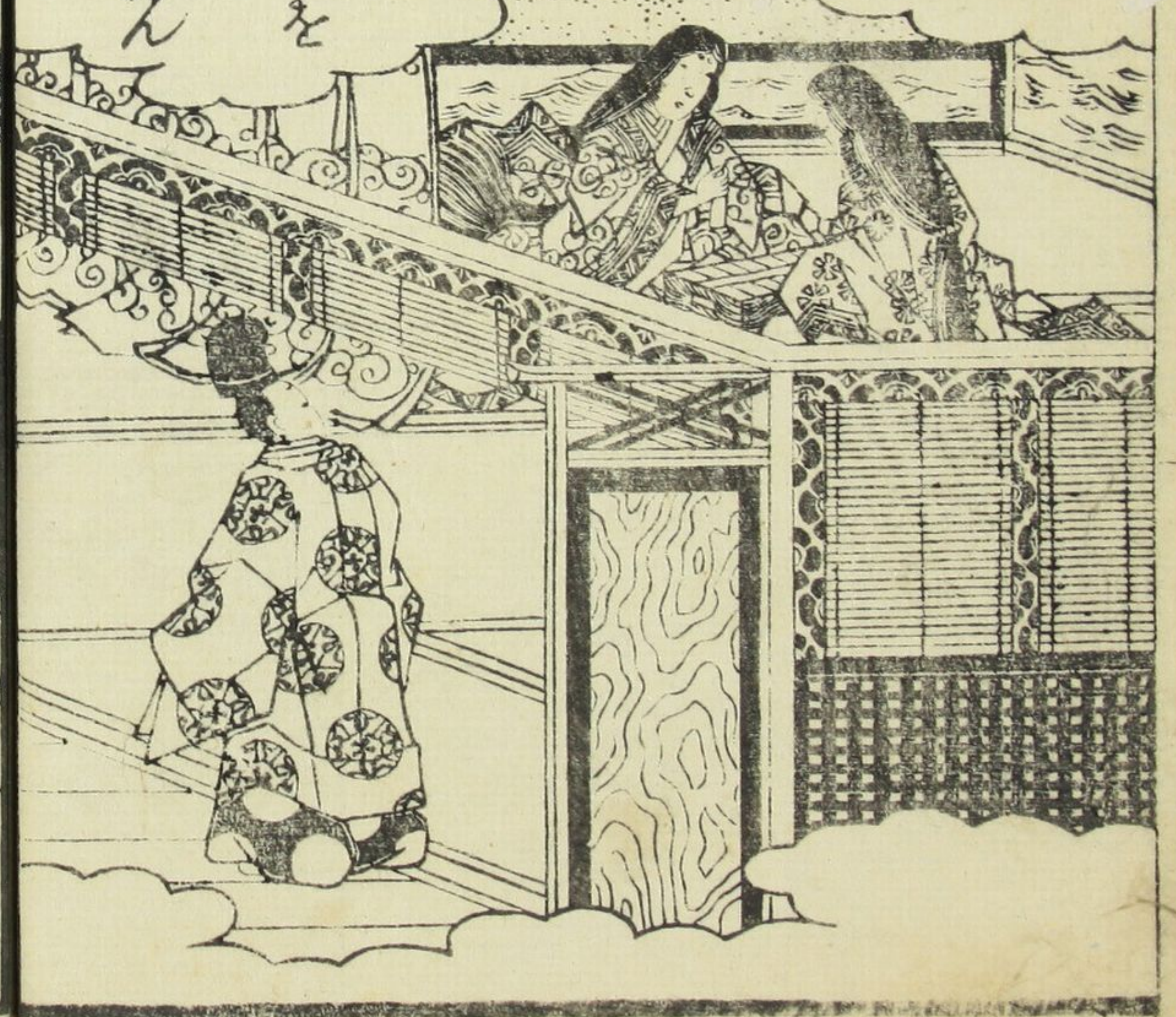
胡蝶
 花ぞの
 おてふを
 さや
 ま
 林まの
 りりり
 うりり
 又りり

螢
 身を
 ながま
 りりり
 まま
 ねのひ
 ありり



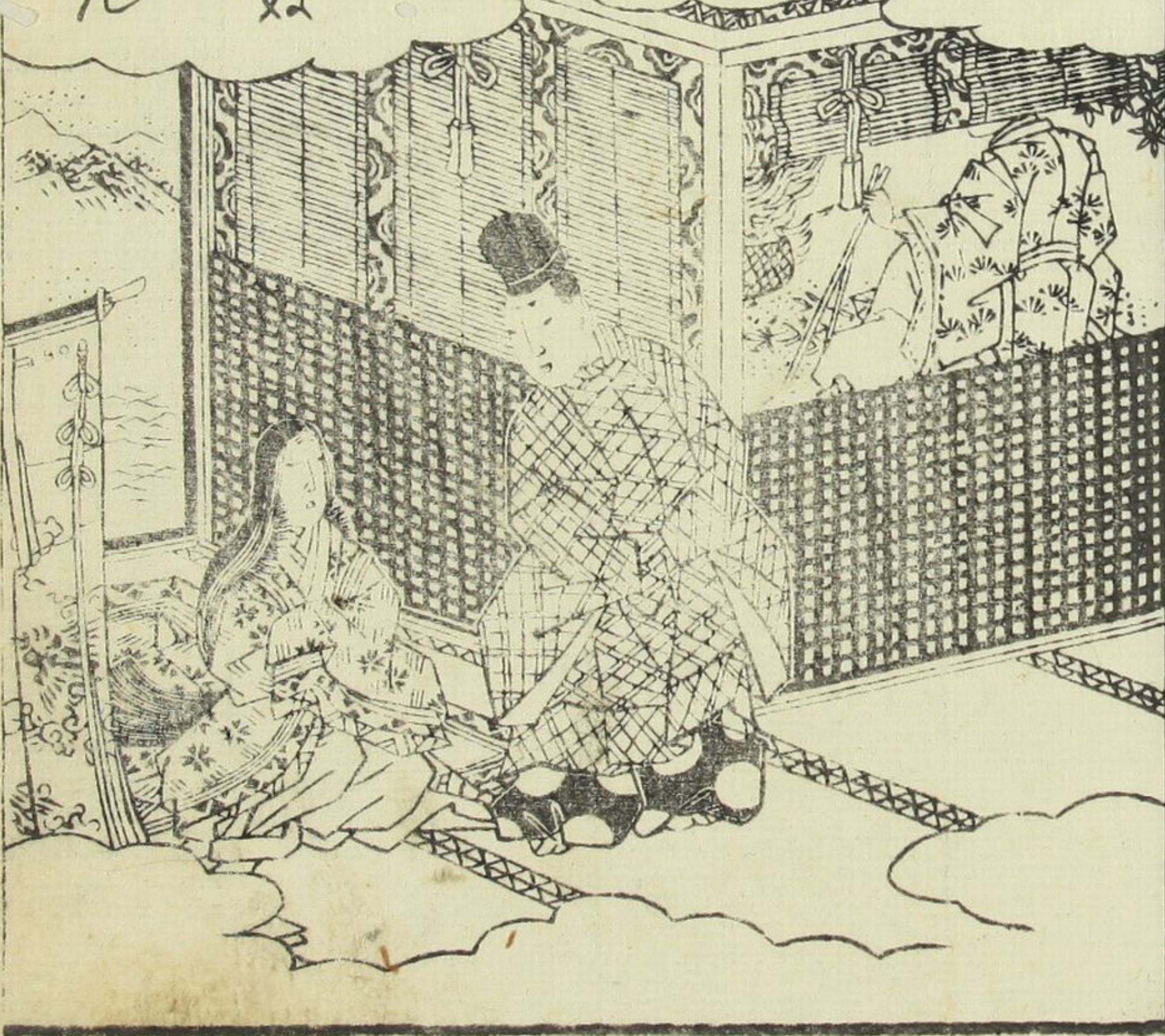
氏のあきらまふかこ
るをまきくふいとあは
きはまじど我いあ
まふふとふふいあ
あわく徳らんま
又玄光源氏をのりの
人ハ世ふおりのわ
らる大政のうらわ
ら一もあふまふま
もあはせありま
又玄のまふあんお
とろくうまありさ
ま相復ふある光源
氏あどのやふあはえ
人を年小ひとふび
みてもうまら一たて

常夏
なま
この
あひ
うさ
あを
ふんを
ゆまの
うま福を
人や
たづねん



まつりてうらたあ
女君のやうふ山置小
かく一をまらまて
あまのまら厚きを
あづあえいとあがさげ
ふれあてんあま
あまをよりくま
ちつをせあま
りあひつはあ
まうごとふまねが
えたりま
又玄は源氏相が
一の美よりしてま
あせいあとなのち
ふふふ

篝火
かひ
あふ
あま
あま
あま
あま
あま
あま



玄光源氏

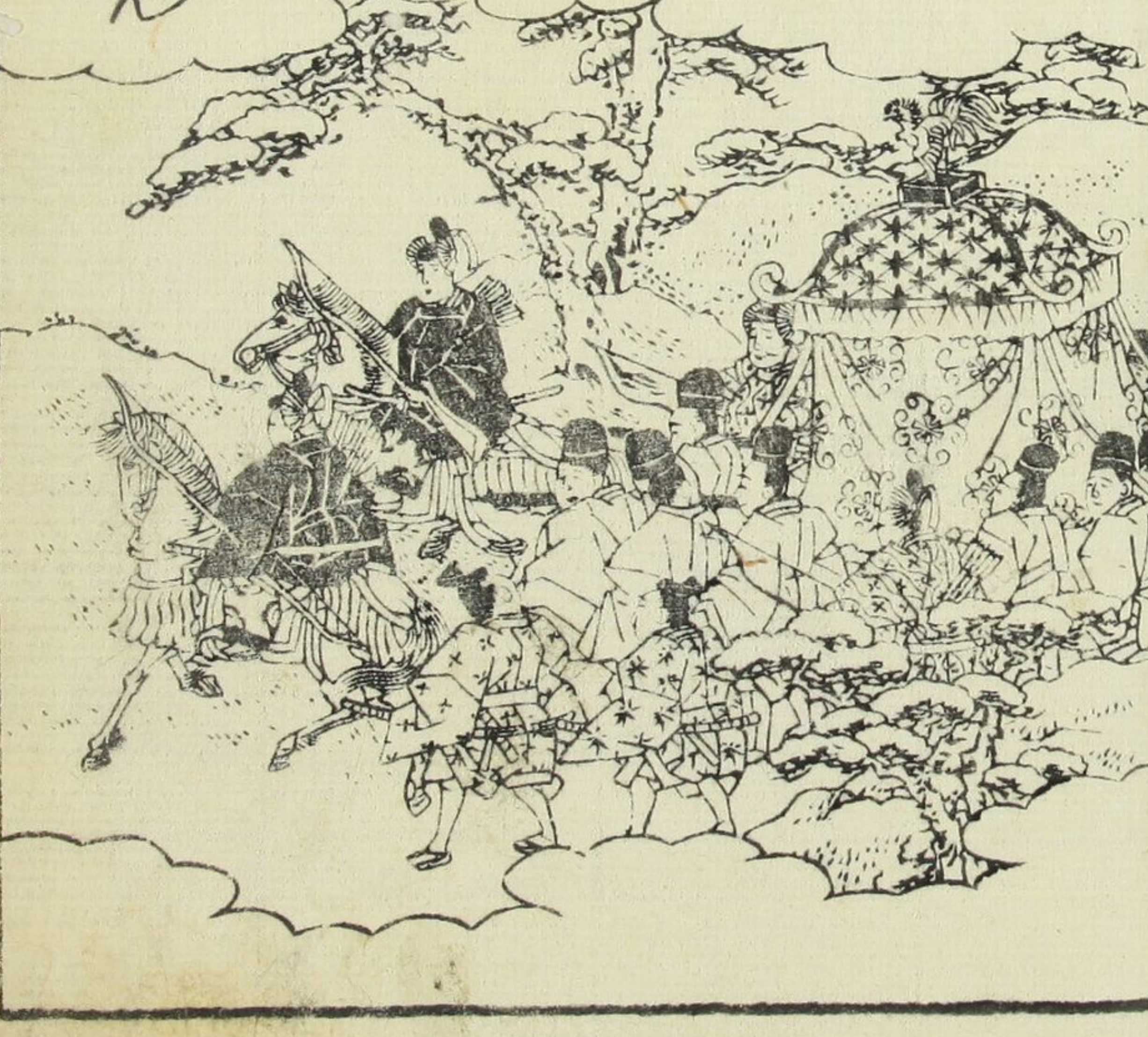
ぐりふす治のま
 のまはれとものち
 あらきらうの所な
 もくそくふもせ
 ませうあまんと
 むらうあひい
 とまうぞういげふ
 そういれあうと
 ひつうらうい
 こいりてとのちら
 風の字治及たいぐ
 つるわの浮舟の女
 のからあやあらん
 むどまが思ひのち
 へん

野か
 風さるぎ
 むくも
 まよふ
 ぬか
 海り
 日ま
 黒



のちのちをやめ
 へんは文解の記
 ちりめあふい
 紫の物後とま
 ちうけさ
 狭衣ふえありは
 小うひいし
 せしむい
 うーのあ
 光保氏のの
 けののき
 まんま
 るふま
 めち
 けり

御車
 山
 ちう
 まい
 けい
 ちう
 ちう
 ちう

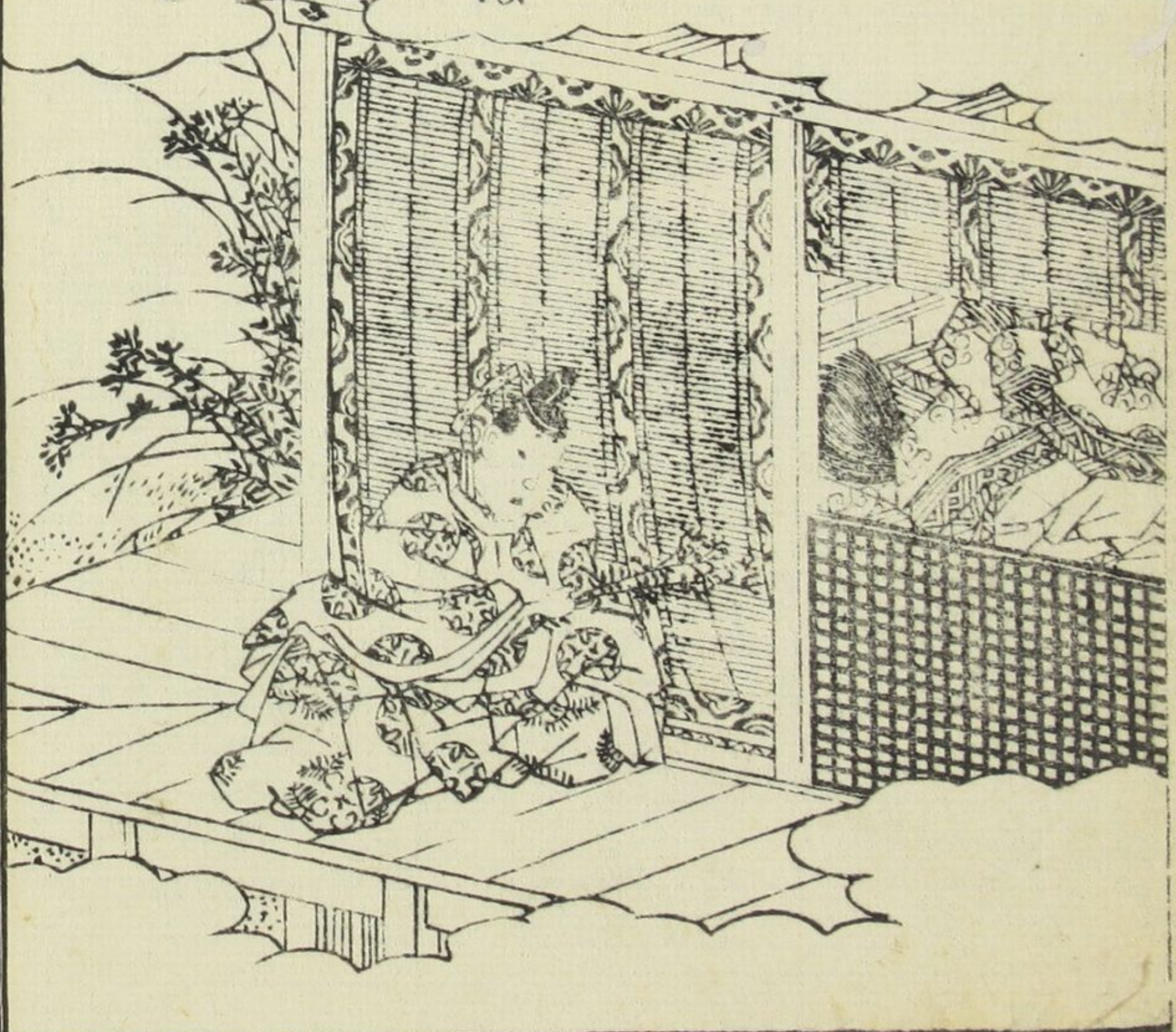


右棟衣小浜氏をむ
 けらる為時の他とて
 ひげらる母のつらさ
 ものつらさいふは
 もとてまはりのもの
 ぐりあまはるけり
 あまふしき引用
 あり
 辨業抄ゆ六棟衣の
 作者大野の三位小
 あらむとつら
 按むふけ拍ぐり
 称美の多順徳院
 御記を花を録情
 不むらとす
 又中山内府の水鏡

小浜武敏が深氏
 物語つらり知して
 信々いささ小丸夫
 の所好とくおやえ
 る日本紀をす
 あらむしき諸家の
 日記小いささ
 あらむしきふささ
 えらりとして時の人
 日本紀の局と号し
 傳りふささ
 鴨の長明が姓名抄
 小浜いささまの
 ぐりあまはるけり
 りき思ふごとく
 世もつらさるる

あまふしき引用
 あり
 辨業抄ゆ六棟衣の
 作者大野の三位小
 あらむとつら
 按むふけ拍ぐり
 称美の多順徳院
 御記を花を録情
 不むらとす
 又中山内府の水鏡

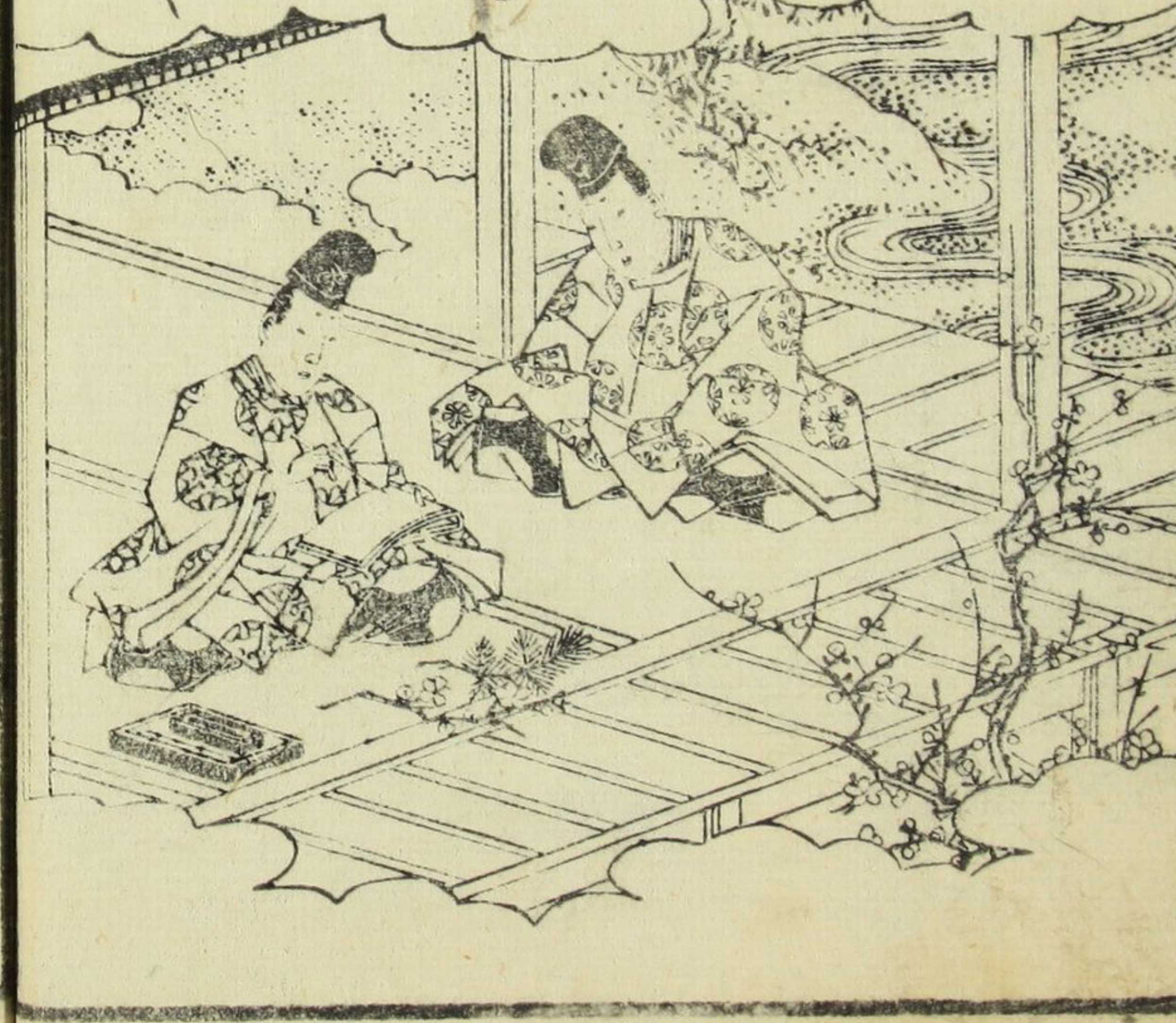
まきわら
 志木柱
 いまはとく
 痛うきぬ
 とき
 来つる
 浦きの
 ちりら
 こころ
 こころ



らうふちがゆきまこと
 とふちひふちひ
 とうふちひふちひ
 おがゆきまことより後
 のものごうふちひ
 いとやまうりねむり
 のありこまきま
 くくまつくまん
 深氏ふまきりこま
 子をばいりやま
 あまんやうつがふ
 とりまきよりま
 を物徳とくまけん
 こらふふさまうり
 惟りのふん九まの
 志うまことハむまぬ

東鑑四十三ふま建
 長六年十月十八日
 丙戌於河内先源
 氏物徳奉有河内
 後河内古親行流之
 云々
 鳥丸光権の云係
 氏物徳一節のこま
 ハ皆奇なりゆふ
 哥ふちひふちひ
 さま中の院の係
 氏の傳叙の河丸
 どのおあせらま
 深氏ハまて哥の
 注ありと内意あま

梅が枝
 まみの
 ちり
 枝小
 とま
 うのん
 神小
 あま
 しほ
 めや



あまのうらま
 友重景
 まひ
 まひ
 姉の
 うらま
 うらま
 とけ
 君
 おの
 つま
 たの
 まん

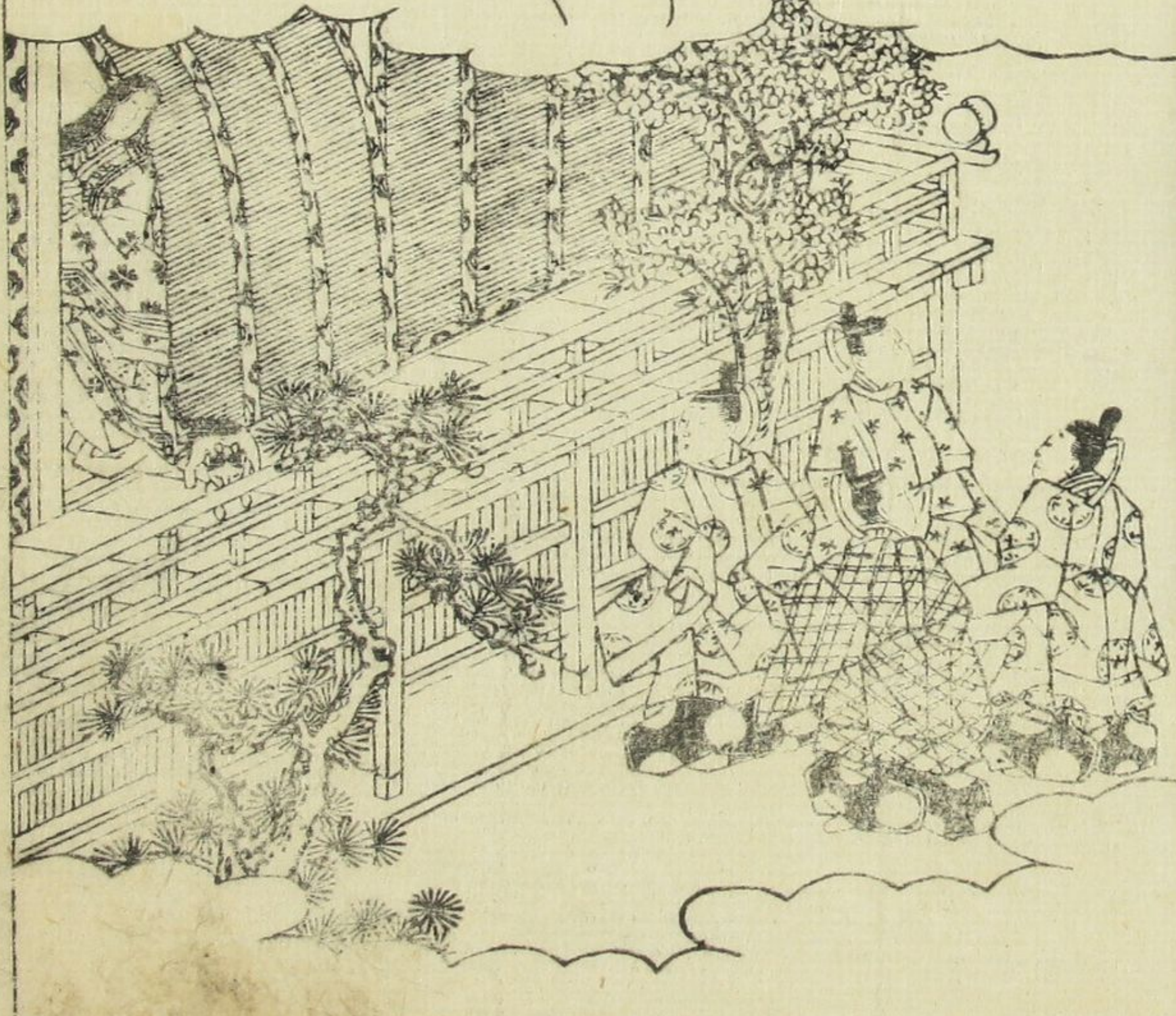


源氏八和紙の奇筆
 ありき有法字の巨
 小文が孝庸の心
 一人因州の牧師
 一いつくば人の後小有
 附孝庸有法字小
 世間のたよりある
 書ハ何を以て仕
 るべきと云ふは必
 けは源氏物語と
 ことなまひし小哥
 学の第一のもの
 とハなまひ又源氏

物語とあはれさせ
 しまふ何れも源
 氏ゆきまゝあり
 とうけまひりぬ
 氏を百遍つゝまよ
 ころものハ再学の
 成就せるなりとの
 まひし孝庸が
 後ありと云々
 勅撰集の中ハあ
 ののぐりの名の出
 ころん
 千載集
 新勅撰集
 續古今集
 續後拾遺集

若菜上
 若菜川
 若菜の
 ようひよ
 ひろき
 のつや
 つむ
 若菜下
 若菜川
 若菜の
 ようひよ
 ひろき
 のつや
 つむ

若菜上
 若菜川
 若菜の
 ようひよ
 ひろき
 のつや
 つむ
 若菜下
 若菜川
 若菜の
 ようひよ
 ひろき
 のつや
 つむ



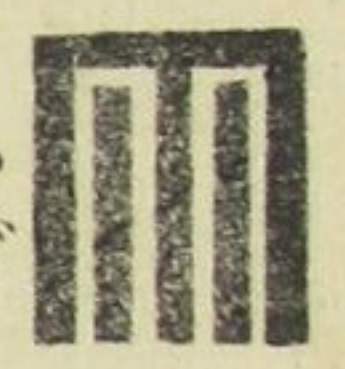
新編古今集

右の撰集考之

拾遺抄小源氏もの
ぐるりの目録部を
あり明石の次小唄
竹ひ東をの次小狭
席等の巻ありき
今の本より八巻
多し

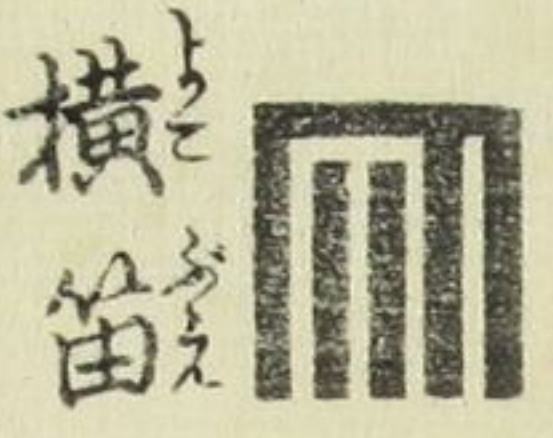
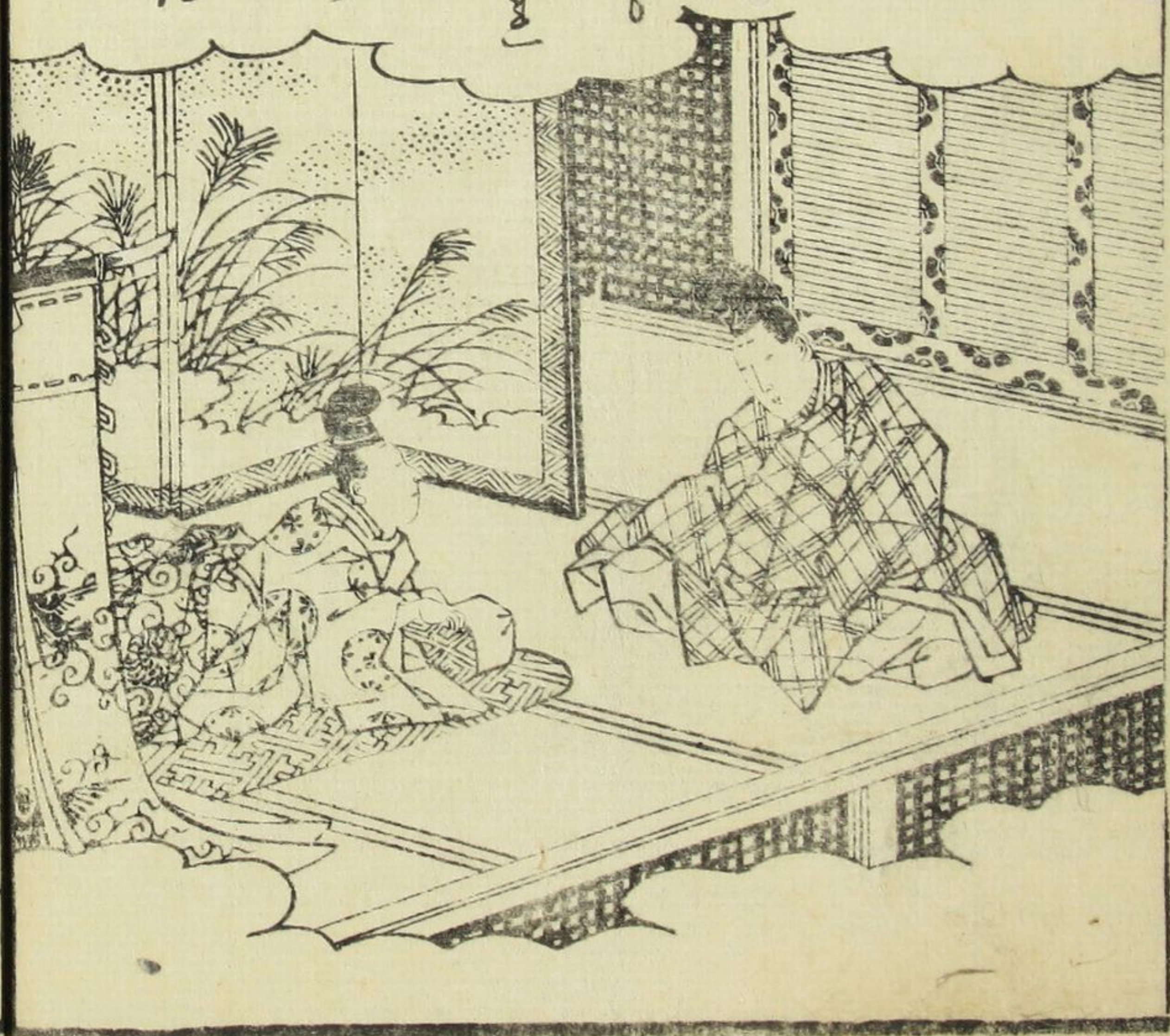
又十四帖のうら橋船
の巻より夏の序
揚のまゝふりたるを
を宇治十帖といふ
こと小源氏の君
かふとさせよむひ
のち小源氏の巻を

大納言治の八の宮
の形君ふりよむひ
まひりあをを書
けり
更科日記にも源氏
ハ二十餘帖といひり
り六十帖といひり
今流布する本を
隠唄竹枝席等の
二三帖も落さるもの
れすこと大教をむけ
て六十帖といふらま
を天台の六十巻を
准らるるといひけ
物語の中小天台教
公小つひよりけり



柏木

いふ
とく
けり
むき
ほ
うまぬ
むひ
の
らん



横笛

よ
ふえの
ま
こと
う
む
ま
つ
せ



あるふよりく台宗
 不ろまのりくろ人の
 かしきよのれ
 源氏物語のちりく不
 好久のあよりりを写
 らふふけどもまて
 好久のまのまふあ
 らむより所の事
 世々の末ふあり也
 けバ上代の風風か
 とろくく俗ふのま
 んる中をちりふその
 あつらふふくしき
 書八人のしきてちり
 づけをるる人せふ
 けさバ世ふあまふ

らばをくをりり
 るふハか不なまも
 こくばをくまて人
 いふかあまぶその
 書ひきくくは又
 ありてもる人ま
 くまらまぶあふひ
 とくくまもまても
 そのせんあるを思
 ひまよりくまひそ
 をくまて筆法
 をあつらまてま好
 久のたふまてまふ
 かりくまらちふ
 りふくの上端の英
 風公のちひをくは



事ハ知とせざばさく
 一々の身まふかを
 つけく書中の上
 きるをのをもるる
 一このことけをうた
 申しまゝく好欠の
 るをわめかるとま
 せんまぐく益
 走くあゝ夫日本
 王道長久あるや
 ハ礼楽文章をう
 一あらむく佐ふ
 おちぎるをゆつてこ
 いふ一の礼楽文
 章をるるまきのハ
 けののぐりふのま

のまのりかゝるま
 不ばものくよりり
 かいま一ふかを
 けくまゝ上代のま
 風あり礼のたぐ
 く一ゆるまふ楽
 の知くまゝうる
 ての男女とのふ上
 高ら一くつふふ
 礼楽をめてあまび
 いや一くゝねらろ
 めちひあり次子
 書中ふ人情をい
 つるまはをびく
 ありより人情を
 ちりまゝハス倫の



化をうーいふ事
 多ーいふ事あり
 てい國もさうも
 家もまことこの
 るさるふよりては
 物ごとくふもは
 のふふよせ人
 情をつーいふ事
 り且志世いのうり
 やくさぬをよーい
 せり舞をさる光
 こさるのまよまで
 もさるーい人の
 氣うこを結さる
 まさごとくさる
 いせりてさ又は物

ごとくふ事あり
 情をさるふ事
 ともぬありまて
 けいのごとく風
 化をさるーい
 けり申もさる
 のさるさるーい
 さるさるーい
 のあさびハ君子の
 さるさるーい
 のあさびをさる
 ささる上福の風
 俗さるさるーい
 うさるさるーい
 けいのごとくさる
 んと人のさるめ



竹川
 け
 ひ
 ね
 の
 あり
 ま



橋
 ひ
 の
 あり
 ま

御代より

あつらえん

入江ふ

あつらむ

和音の

うら波

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

その返さずふ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

早蕨

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

宿本

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

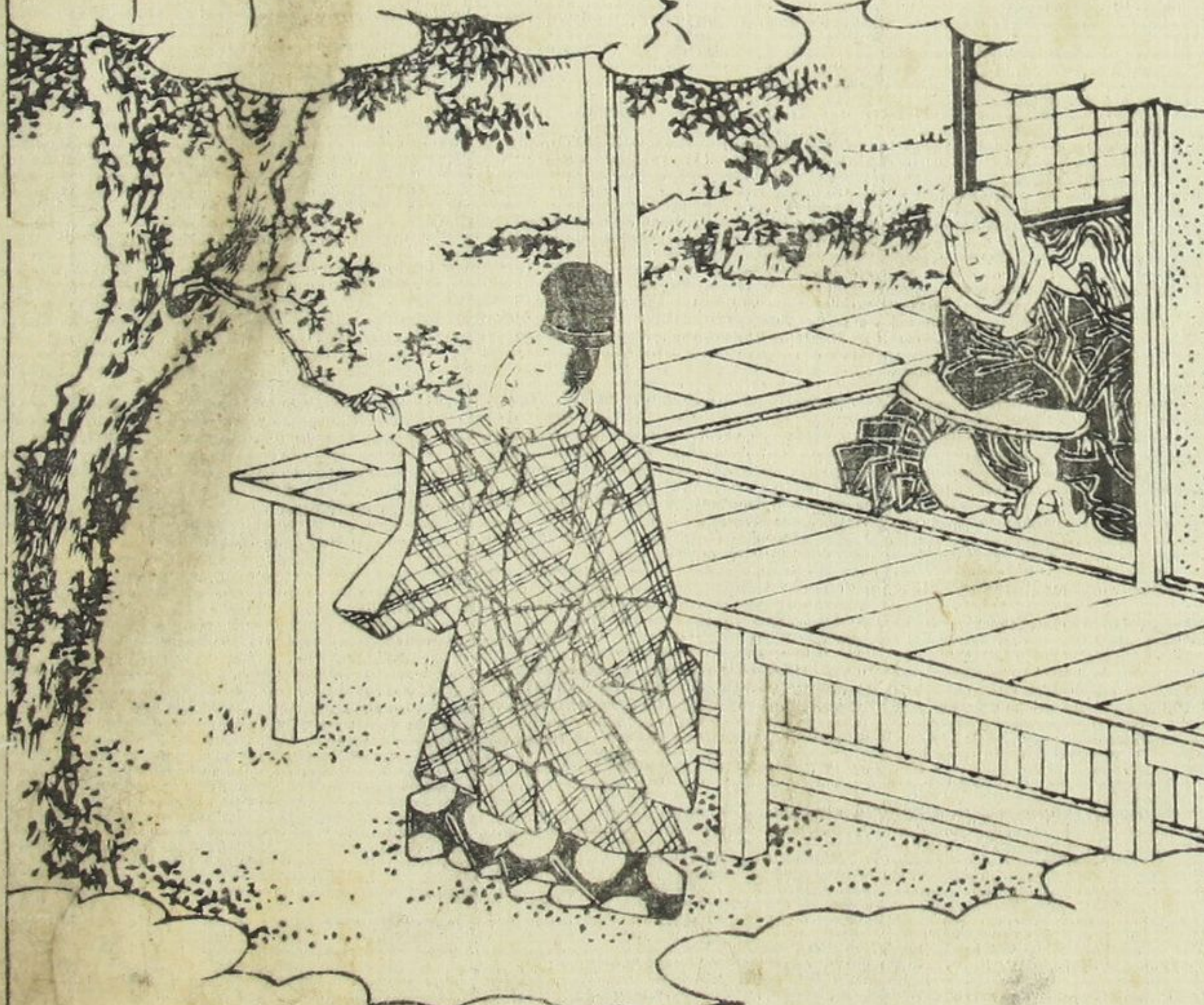
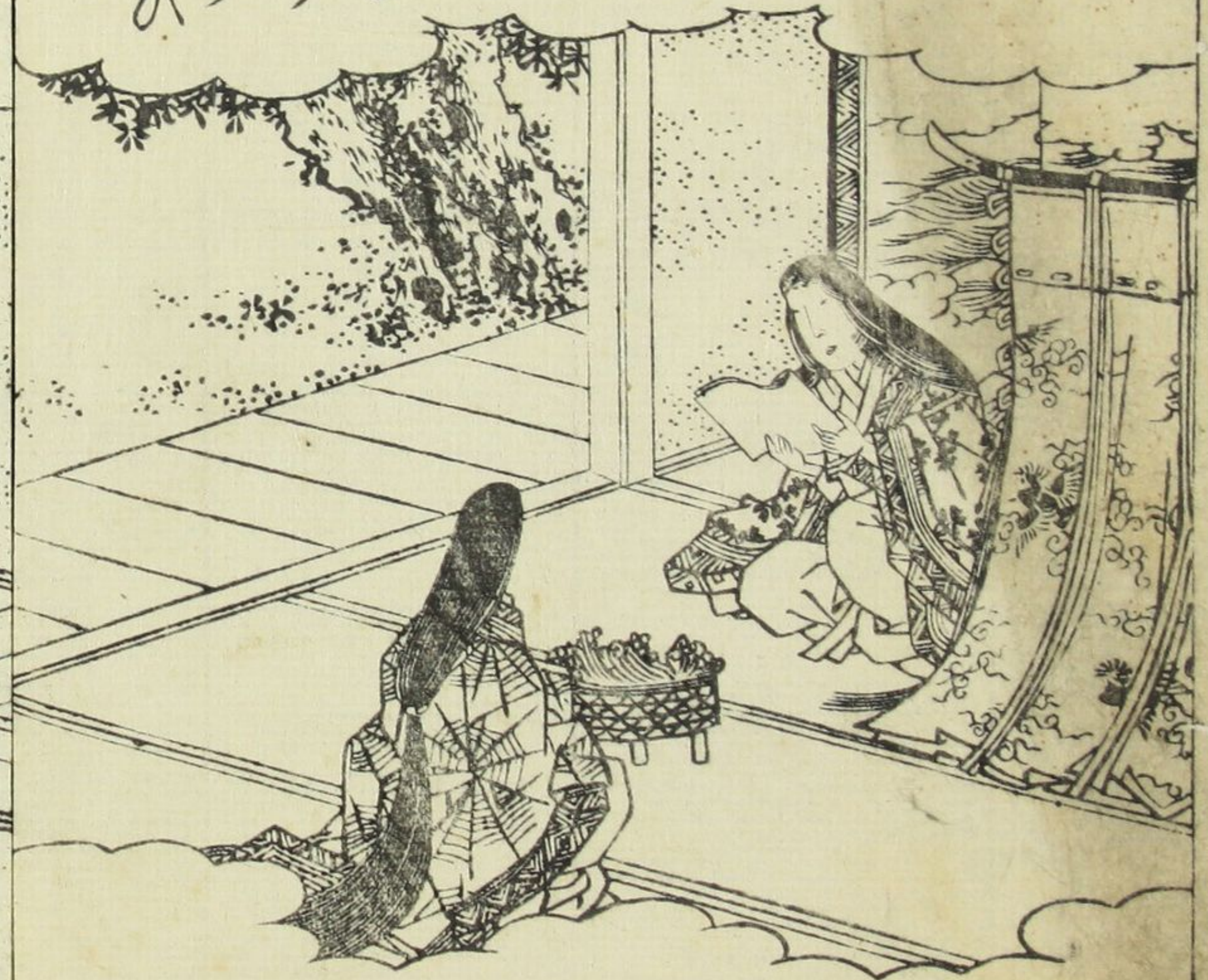
あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ

あつらむ



為章

むらさきの

ゆかりゆかり

多岐の

程三ヶ

やま

むらさ

治文

ひとの

根もあ

むらさ

やうり

武彦母の

資矩

筆とりの

君が女

けし

程三ヶ

こま

源氏物語玉の小櫛

宣長

そのか

み

ま

玉の

ま



東屋

あま

むらさ

あま

ま

あま

あま

あま

あま



浮舟

あま

あま

あま

あま

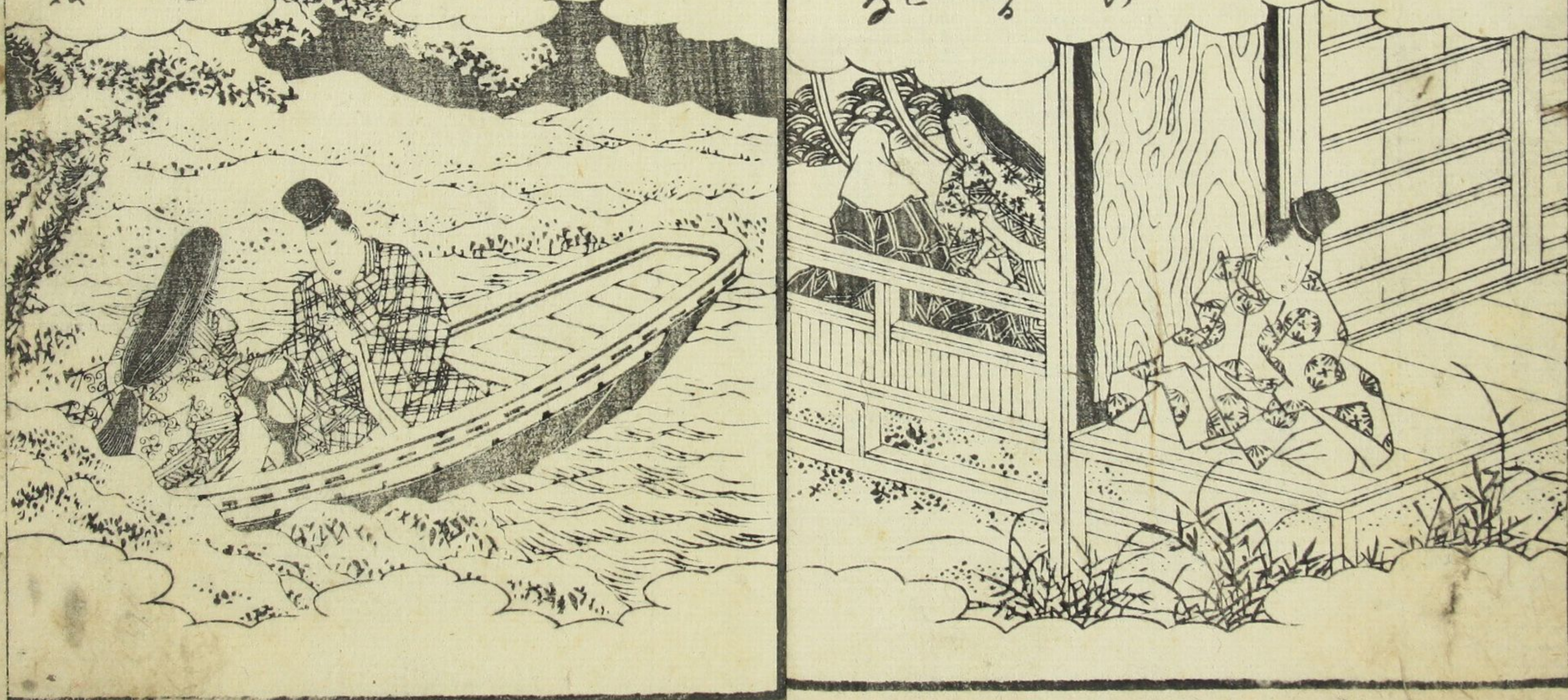
あま

あま

あま

あま

あま



基重

数あるて

名をさへくも

身もまじりも

あつたて

まのぐ

師阿

さてまその

うひらあぐも

うきうりの

世ふ

和歌の

浦浪



蜻蛉

ありと

はみ

とく

又

あつ

ま

きえ

うげ



てき

子習

身を

あげ

川の

せを

ま

うけ

と

め

宗家

法のある

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

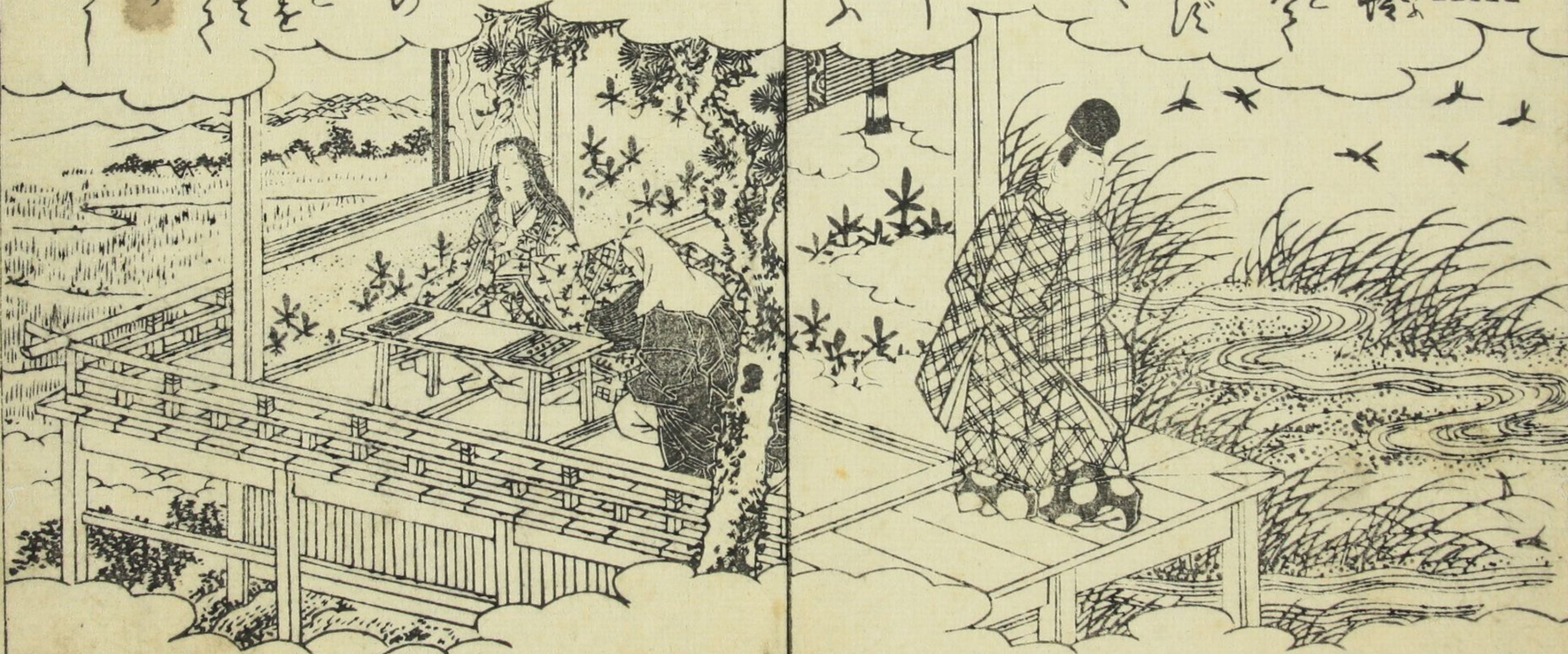
あつた

あつた

あつた

あつた

あつた



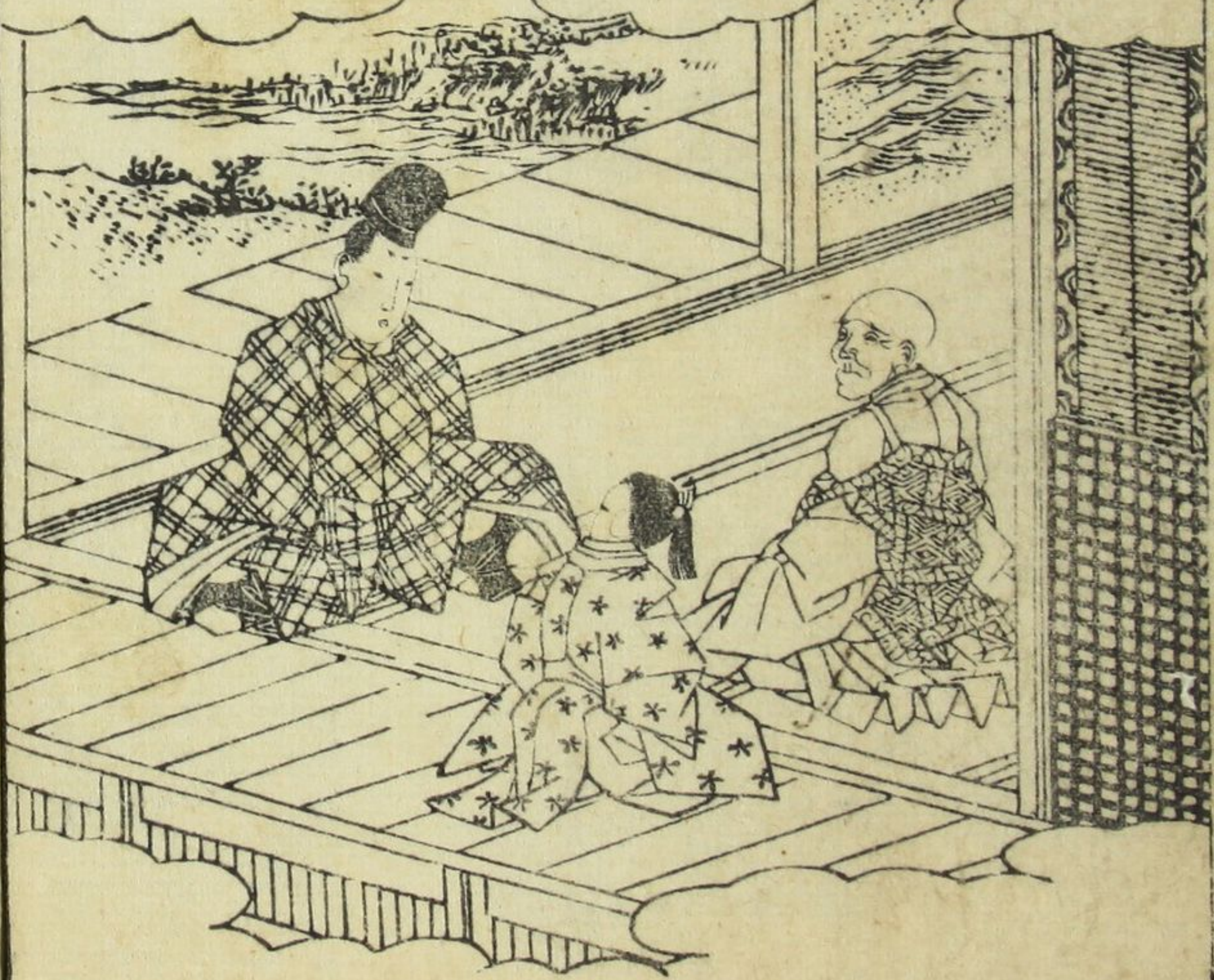
○仙源抄小源氏物語の勢走びる御と
 のをいふは不
 て改定しと跋不
 かるづいひの事を
 志すはまことなる末不

明魏

山水のその
 ころのそのを
 まよめ
 千のの
 流るるを
 むごろ
 ぎりけり

〇〇〇

のりの
 ころの
 まよめ
 むごろ
 山
 むごろ
 むごろ



右 元板文化九壬申年
 再板天保八丁酉年

江戸芝神明前
 和泉屋市兵衛板

雛本百人一首倭錦

女用文艶詞 寸小本

同 源氏物語絵巻

女年中夜夏衣絵 寸小本

同 女今川繪巻

驟玉百人一首 寸小本

同 武者錦五冊入

女今川雲井の語 寸小本

常盤百人一首中本

女多あふひ状 寸小本

